

クマーリラによる無形象知識論の方法について

吉 水 清 孝

Śabarasyāmin の *Mīmāṃsābhāṣya* に引用された *Vṛttikāra* (V) (5 c.) は、無形象知識論を *Mīmāṃsā* 派に導入した。*Kumārira* (K) (7 c.) は、これに基いて、*Ślokovārttika*, *śūnyavāda* 章 (Śū.) の中で *Dignāga* の有形象知識論を批判し、彼の無形象知識論は、*Bhāṭṭa* 派に継承されていった。本稿では、V説やK以降の *Bhāṭṭa* 派説との比較を通じて、Kの無形象知識論のもつ特徴を指摘したい¹⁾。

Vは、*Mīmāṃsāsūtra* 1-1-4 への註釈の中で、直接知覚の真理基準を「認識対象の、感官が適用されている外界の实在との一致」と定義した²⁾。ここで仏教徒が、全ての知は夢の如く外界の対象をもたないと反論 (*nirālambanavāda*)³⁾ し、更に、この主張を論証するべく有形象知識論に訴えた (*śūnyavāda*)⁴⁾。青色などの知に顕れた形象 (*ākāra*) が各々の知に固有の姿であるならば、知の認識作用は知自身の内で完結し、外界まで及ぶことはないのである。これに対してVは、形象はその知自身に固有の姿ではないことを論証しようとするが、その第一の根拠を次のように説く。

「しかし我々によれば、知は形象をもたず、外界の物体 (*artha*) が形象をもつのである。それ (*artha*) は、外界の場所に接したものとして、直接に知覚されるから。」(MBh. p. 28, ll. 17-18)

一方Kは、Vが定義した直接知覚の真理基準をそのまま承認し⁵⁾、また無形象知識論の目的を、Vと同様に、直接知覚の認識作用が外界の实在に及び、認識対象が外界の实在と一致し得ることを論証すること、と考えている⁶⁾。しかしKは、Vが提起した上記の根拠には賛同せず、これを次のように改変してしまう。

『それは、外界の場所に接したものとして』というこのことによって、把捉するもの (*grāhaka*) の確認を伴わない、把捉されるもの (*grāhya*) の形象の感受が言われているのである。」(Śū. k. 79)

続けて、Vが提起した根拠を斥ける理由を述べて言う。

「反論者に対しては、(物体が外界の場所に接していることは、理由にはなら) ない。(それは) 証明さるべき事柄であるから。物体が形象をもつことを証明するためには、外的な場所との結合は、理由としてふさわしくない。」(Śū. k. 80)。

Kは、Vが論点先取を犯していると批判しているのである。有形象知識論によれば、壺などの物体のみならず、それを取り囲む空間も、形象として知の知覚領域内で知覚される。ところがVは、形象として知覚されるものを一物体としか解さない。そして、物体の周囲の空間が外界であることは、その物体自身の外在性と共に、無形象知識論によって初めて証明さるべき事柄であるにも拘らず、逆に、知が無形象であることを論証するための理由として、これを行使してしまうのである。

Śū k. 79 に於てVの論証根拠の代りにKが説く「把握するものの確認を伴わない、把握されるものの形象の感受」とは、形象の感受とその形象の知自身の確認との非同時性による論証の一端である。もし直接知覚が外界の实在を対象とせず、感受された形象がその知と別異ではないならば、形象の感受が、とりも直さず知の存在を確認することになる。従って、形象の感受とその形象の知自身の確認とは、時間的に同時に成立するはずである。ところがKによれば、両者のうち一方が成立する時には決して他方は成立しない。それ故、形象はその知とは別異であり、従って、直接知覚の認識作用は外界の实在まで及ぶのである⁷⁾。

Kによるこの論証の原型は、既にVの論述の中に見出される⁸⁾。しかしVの論述の中では、知自身の確認を伴わずに感受されるものが、形象ではなく、外界の物体 (artha) とされている。このため、有形象知識論者に対する論点先取を警戒するKは、Vの論述に於ける論証の原型を認識事象の内在的分析の方向に純化して、外界の物体自体の代りに、知に顕われた限りでの対象の姿である形象に着目し⁹⁾、形象の感受と知自身の確認との時間的関係を論証の根拠としたのである¹⁰⁾。

それでは、形象の感受を伴わずに、知のみが如何にして確認されるのだろうか。Kによれば、知はそれ自身に固有の形象をもたないため直接知覚されないが、何らかの形象の感受としてその形象をもつ物体が知覚された後になって、「もし知が無かったならば、この物体の存在が知覚されはしなかったろう」という arthāpatti により、知の存在が確認されるのである¹¹⁾。

しかしK以降の Bhāṭṭa 派では、対象となった实在のうちに知が「所知性」(vedyatā, jñātātā)を生ぜしめ、この所知性の知覚が arthāpatti により知の存在を想定する根拠となる、と考えられるようになった。Pārthasārati (11 c.) は当時の「所知性」説を次のように紹介する。

「知により生じ物体に備った、prakāśana, bhāśana などの同義語により表示される或る種の特性 (atīśaya) がある。そしてそれは、加熱により生じ粥などに備った特性

の如く、知が確認されていなくとも知られる。それ故、(この特性は) 知を想定させるものである。」(NR p. 319, ll. 4-6)。

「所知性」は、既に Śū. への最初の註釈者 Umbeka (7 c.) により説かれており¹²⁾、所知性とは何か、それは如何にして知覚されるのかが、Bhāṭṭa 派内で様々に論議された¹³⁾。しかし K 自身は、實在の側に認識による影響が起るとは述べていない。知の存在を想定せしめる根拠は「物体の存在が知覚されたこと」(arthasadbhāvaḥ dr̥ṣṭaḥ sann Śū. k. 182) であり、物体のもつ形象の感受に他ならない。K は、形象の感受を説明する時と同じく、知の確認のための根拠をも認識事象の中でのみ見出している。實在の側の「所知性」に依拠する Bhāṭṭa 派の無形象知識論は、認識事象の内在的分析という K の方法論から逸脱していると言えよう。

1) *Ślokaṣāstrīka* (ŚV.) & *Nyāyaratnākara* (NR.): Chaukhamba S. S. 3, 1898, *Mīmāṃsābhāṣya* (MBh.): Frauwallner ed., Wien, 1968, *Tatparyatīkā* (ŚVT.): Madras Univ. S. S. 13, 2nd ed., 1971, *Kāśika* (ŚVK.): Trivandrum S. S. 99, 1929.

2) yadviśayaṃ jñānaṃ tenaiva samprayoge indriyāṇāṃ puruṣasya buddhijanmasat pratyakṣam. (MBh. p. 26, 11. 3-4).

3) MBh. p. 26, 11. 22-24.

4) MBh. p. 28, 11. 14-16.

5) ŚV. Autpattikasūtra k. 19.

6) Śū. kk. 1-3.

7) Śū. kk. 73-78.

8) utpadyamānaivāsau jñāyate jñāpayati cārthāntaram pradiṣvadeva ity ady ucyeta, tan na. na hy ajñāte 'rthe kaścid buddhim upalabhate, jñāte tv anumānād avagacchati. tatra yaugapadyam anupapannam. (MBh. p. 28, 1. 20-p. 30, 1. 3).

9) Śū. kk. 5-9 に於て本章の問題設定が為されているが、そこでは、外界の實在の有無を直接に論ずるのではなく、まず形象が知に固有の姿であるか否かを論じ、それによって外界の實在の有無が決定される、という筋道が示されている。(なお Śū. では、外界の實在を認めつつ有形象知識論を説く経量部の立場は考慮されていない。)

10) K は、形象の感受が知の確認に対し時間的に先行すると言っているものであり、単に両者の認識方法が論理的に区別されると言うのみではない。yugapad gr̥hyamāne 'pi nākāro 'rthasya lakṣyate/tasmād arthasya samvittiḥ pūrvam yatnena sādhyate// (Śū. k. 241).

11) nānyathā hy arthasadbhāvo dr̥ṣṭaḥ sann upapadyate/ jñānaṃ cen nety atah paścāt pramāṇam upajāyate// (Śū. k. 182).

12) sarvasyārthendriyamaṇaḥsamnikarṣe saty arthasyāpi vedyatālakṣaṇaparokṣarūpātīśayo 'sti yad utpannaḥ, (ŚVT. p. 283, 11. 20-21).

13) ŚVK. p. 121, l. 27- p. 122, l. 1, NR. p. 319, 11. 10-12. (東京大学大学院)